

## 第6回（仮称）「漱石山房」記念館整備検討会議事 要旨

■ 日時 2013年1月19日（土） 9時30分至12時30分

■ 場所 新宿区立新宿歴史博物館 講堂

### ■ 出席者

委員 中島座長、中川副座長、石崎委員、半田委員、山岸委員、牧村委員、伊藤（幸）委員、沖山委員、中村委員、田中委員、夏山委員、貝田委員、桐生委員、江木委員、伊藤（聡）委員、小林(浩)委員、小林(智)委員、三又委員、八重樫委員、吉川委員、川嶋委員

事務局等 加賀美地域文化部長、安河内榎町特別出張所長、吉川みどり公園課長、小俣総務部施設担当副参事、橋本文化観光課長、石塚文化資源係長、北見主任主事（学芸員）、小泉主任主事、株式会社丹青社

■ 欠席者 志村委員、清水委員、江田委員、松林委員、百足山委員

### ■ 内容

#### 1 開会

中島座長より開会を宣言

#### 2 前回のふりかえりと本日の予定

（中島座長）

- ・ 前回は、この記念館でやりたいこと、夢を出していただいた。本日は、施設・設備の面における方向性を出していくことが仕事となる。スペースや予算の制約でできないこともあるが、これだけは達成したいということについて討議していただきたい。
- ・ 来月には、ソフト、ハード両面を合わせた原案をつくっていく。この検討会には、行政だけではなく、地域の方、一般の方々が入っているので、整備基本計画案プラスアルファとして検討過程の希望・要望なども報告書に盛り込めるとよいと思う。

#### 3 基礎調査以降の研究成果について（石崎委員より）

平成23年度に実施した『「漱石山房」の復元に関する基礎調査』にご協力いただいた石崎委員より、報告書作成後に判明したことについて、資料『報告書』に示された「漱石山房図」の訂正その他に基づき、主に以下の点についてご講演いただいた。

- ・ 栗山弘三郎「夏目先生のおもいで」『表装』第五輯について
- ・ 玄関の構造ならびに格子戸について
- ・ 玄関の突き当りの部屋と、その奥（客間西側）の部屋の構造について

- ・ 天井ならびに壁面の壁紙の文様について
- ・ 客間に置かれていた屏風とそこに書かれている文字について
- ・ 芭蕉その他の植栽について

(中川副座長のコメント) 基礎調査において疑問に思ったことをさらに進めていただいた。石崎委員の問題提起をゆっくりと検討し直して、さらに高いレベルのものにしていきたい。記念館内にどこまで再現するかは別にして、ぜひもう一度検討してみたい。

漱石山房の庭は、野趣あふれた、漱石の文人趣味の現れた庭というお話があった。漱石という人は本当に面白い人で、中国の素養も非常に高い。中国的な影響を受けた文人というのは、庭について、日本庭園のような様式化されたイメージを持っているが、漱石山房の庭は違う。漱石は、ロンドンにも行っているが、ロンドンの自然主義の庭とも全然違う。こういった庭がどうしてできたのかというのは非常に重要で、漱石の内面性、文学理念というものと関連があるのかということ、文学者の方に指摘していただければ大変面白いのではないかと。何らかの形で資料的に詰める必要があるかなと思っているので、ぜひお願いしたい。

(中島座長) 漱石が借りる前に、庭がどうなっていたのかは分からない。漱石が約 10 年間住んだその過程で変わった部分もあるだろうし、元のままのところもあるだろうし、そこが非常に難しい。

基礎調査報告書に、こういった新しいデータがあるということを増補の形で残していくことが求められる。

#### 4 事業計画・展示計画のまとめについて

事務局より、資料「事業活動計画(案)」に基づき、(仮称)「漱石山房」記念館で行う、8つの事業計画案について説明した。

- ①収集・保管事業、②調査研究事業、③情報提供・発信事業、④展示公開事業、⑤教育普及事業
- ⑥文化観光事業、⑦交流・地域連携事業、⑧利用者サービス事業

(事務局) 参考資料として、「第5回(仮称)漱石山房記念館整備計画案・グループ討議の意見の記録」を配布している。今回の整備基本計画案に盛り込むには詳細なご意見や施設の整備に関わるご意見であったため、事業活動計画案からは割愛したものもあるが、これらについても、別に検討会報告書という形で記録として残し、館の運営に当り実現できそうなものは検討していきたい。

#### (事業活動計画案に関する質問・意見)

- ・ 調査研究事業について、今取り組むべきなのは、「漱石とまちづくり」ではないか。地域の方々は、記念館を町おこしや地域活性化という点で期待されている。どう活用していくのか、漱石とまちづくりについての調査研究を、学芸員を雇えるかなどの課題はあると思うが、区の文化財調査員のシステムを活用するなどして、これに力を入れていく、あるいは、特化していくことを考えてもいいのではないかと。その中で、地域や大学との連携などが出てくると大変良いと思う。
- ・ 木曜会に集った弟子たちや漱石を取り巻く人々に関する調査研究について、その範囲をどのくらいまで広げていったらいいのかということが課題になる。小宮豊隆と親交があったロシアのセルゲイ＝エリセーエフは、日本学の権威で、弟子、孫弟子まで含めると世界に何百人という優れた人材を生んだ人。漱石山房に出入りしていた人で、ペテルブルグ大学で漱石の『門』をテキストに講義をしたとい

われている。これからの時代、情報化社会の中で、漱石をどう位置付けていくのかということとも関わってくるので、こういった人を調査研究の対象に含めることで、その幅を広げていきたいと思う。

- ・時代ということもあると思うが、木曜会に集った弟子たちや取り巻く人々の中に、残念ながら女性の名前が載っていない。来館者の多くは女性であるので、樋口一葉など同時代の人物も含めて女性の名前があるといいと思う。

(中島座長) 漱石山房を晩年に訪れた吉永秀は、漱石に人生相談のようなことをした女性。吉永秀宛ての漱石の手紙は、仙台の宮城学院女子大学にあり、将来事業展開に活用できると思う。

- ・この検討会は非常にスムーズに意見が集約されているが、誰が中心になってまとめ、どういうふうに行うかというイメージが湧かない。こういう意見もありましたという形で、行政主導でそのまま先に進んでしまうのではないかという気がしないではない。そこで、伺いたいことが3つほどある。

この記念館は、組織的には、新宿歴史博物館の管轄の中で行われるのか。それとも、歴史博物館とは全く独立した形で新たに建てられるのか。それを伺わないと、事業の展開の仕方が全く変わってくるのではないかと思う。箱物は作ったけれども、事業の運営主体がどこにあるのかわからないと、結局は、無用の長物にもなりかねない。特に予算に関しては、今後、非常に厳しくなると思うので、どこが管轄して、どこが運営を継続的に行う責任を取るのか、そのところを伺いたい。

次に、記念館の設計は、いわゆるコンペで行うのか指名でやるのか。どういった人に委嘱するのかが分かれば、例えば、今日や前回の検討会の意見をその人に伝えることができる。

さらに、文化事業というのは、基本的に人の個性によるところが大きいと思う。顔が見えないとうまくいかないことのほうが多い。文化事業というのは、意見が一致しないことが普通であって、喧々諤々意見が湧いて、「えいや」と誰かの個性が主導するという例がしばしばある。将来の事業の運営を誰が行うのかということに、想定があるのか。行政の一環として行っていくのか、それとも、業者に一括して丸投げするのか、この機会に教えていただきたい。

→(事務局) 記念館の行政組織上の位置付けについては、正式には、公の施設としての記念館の設置条例を制定して位置付けることとなる。イメージとしては、歴史博物館の分館的な位置付けではなく、歴史博物館と並列するような位置付けとし、地域文化部文化観光課が所管していくことを想定している。

次に、記念館の建築や展示の設計者の選定については、どのような方法がこれから策定する整備基本計画をいちばん生かせるのかを十分に検討した上で、特定の事業者・建築家をお願いするのか、あるいは、広くプロポーザル等によって提案を公募するのか、選定方法を講じていきたい。

また、今後の館の運営については、いくつかの方法が想定される。一つは、区の直営による方法、もう一つは一般的にとられている指定管理という方法。正式には、記念館の設置条例に定めることとなる。いずれの方法を選択しても、館の運営については、区の大きな基本的方針をしっかり定め、ぶれないような形で運営していきたい。

- ・この検討会の予算を議会に提出したのは中山区長だが、そもそも、漱石山房を復元するという、そして、記念館をつくるということ、中山区長にそれだけの予算を区議会に提出させたのは誰なのか。その人の個性がかなり強く出た記念館ができるだろうし、事業の運営にも反映されていくだろうと思う。例えば、漱石の末裔のどなたかが、一生懸命に動いているとか、そうではなくて、中山区長が本当にやりたくて区長の椅子をかけて提案しているのかもしれない。あるいは、区の職員の誰かが、も

つと文化的な区にしたいという情熱で、区長に予算案を区議会に提出させたのか。

誰がこの事業をやりたいかというのがわかれば、その人と一緒にやろうということになり、住民も一緒に動ける可能性がある。それが見えないと、今の漱石公園のような状況になってしまう。目の前に住んでいるが寂しい。そのあたりが見えてくると乗りやすいという気持ちを汲んで、少し教えていただけるとありがたい。

→（事務局）誰かひとりということは難しい。お話しがあったように、中山区長も自身のマニフェストとして取り上げている事業で非常に熱意を持って取り組んでいる。文化観光を担う課としても、いろいろな文化資源を発信していくということは、必要だと認識している。現在の漱石公園についても行政だけの取り組みということではなく、地域の皆様も一緒に整備をした経緯もあり、この記念館についても、こういった開かれた検討会を行い、その中で機運の盛り上げも図っていききたい。また、特にご遺族の方が新宿区に対して強い働きかけをしたかと言うと、決してそういうことではない。

区長自身が「土地の記憶」を後世に残していくということに力を入れており、今回、区営住宅が移転する機会をとらえて、山房の復元を行っていききたいという強い思いがあった。物理的な条件、財政的な条件の下に、区長の思いをどこまで実現できるかについて検討し、動くのは、われわれの役割だと思っている。区長だけの思いでもなく、行政だけの思いでもない。多くの方々の思いを捉えて、この事業については、ぜひとも実現していくという思いで臨んでいる。

- ・非常に重要なのは、漱石というたぐいまれな文豪を慕う多くの人々がいるということと、たくさんの方が研究されてきたということだと思う。お話しがあった「顔が見える」ということ、これは大事なことで、行政が頑張るのはある意味当然のことだが、この検討会、地域の人たちが「顔」になっていかないと全国の人たちの思いに応えられないのではないか。計画を作ってバトンタッチすれば終わりというものではなく、実現していく、それを育てていくということが最も重要な役割だと思う。ここに集まった人たちは、そういったミッションを背負ってやっているということだと思う。私も人ごとではないので、できるだけことをしたいが、皆さんが主人公になるのだという気持ちでやっていただきたいと思う。よろしく願いいたします。
- ・夏目漱石は、日本だけではなく世界で愛され、子どもから高齢者までが注目している人物であり、新宿区の榎地区が生誕・終焉の地である人物。文学者が、そこで生まれ、没した土地は案外少ないと思う。地域も一生懸命応援して、これからいろいろな場面でこの漱石山房記念館についていろいろとアプローチしていきたい。新宿区、特に榎地区にこうしたものができるということは、地域の者も大変大切に思っているし、これからはいろいろな面で協力していきたいので、ぜひ、皆さま方の力をお借りして、本当に作って良かった、来て良かったという、そういう記念館にしていきたいと思う。
- ・この事業活動計画について、非常にきちんと目配りが利いて網羅されている。しかし、大事なことは、メリハリ、この辺が力点なのだというところを、もう少し言葉の上で出したほうがいいのではないか。キーワードは、グローバルとローカル。前回のグループ討議でも意見が出たが、世界の中の漱石という視点を、ぜひ強めにした。そして、逆にローカルを大事にした。世界につながる漱石、世界も漱石を見ているし、漱石も世界を見ているという観点、そして、地元、ローカルというところを、掘り進めていくと、実はグローバルにつながるというような観点を出したほうが、特徴が出るのではないか。

（中島座長）報告書のまとめの前文や内容にも表現の工夫は必要ではないかと考えられる。

先ほどのご意見について、区議会の中にこの事業を推進するグループもあり、区内にNPOもある。

調査を実施したり、この検討会を開いたりということに予算が出ているということは、これは議会で承認されているということ。地域の中での自然な盛り上がりや、生誕 150 年があるなど、機が熟したということが考えられる。それをどのように多くの人が納得できるような形で実現していくのかが、これからの課題ということになってくる。

施設の設置条例は、何年度になるか。

→（事務局）今までの例から考えると、記念館オープンが平成 29 年とした場合、平成 28 年に制定ということになろうかと思う。

・調査や検討会の予算が議会を通ったということは、事業の実行が約束されたということとほぼ一致するのだから、必ず予算はつくのでは。

→（事務局）予算については、設計や建設について、その都度に予算を取らないといけないが、われわれも議会に十分に説明し、可能な限り検討会の意向を反映できるような予算付けをやっていきたい。区長もそういう思いでいる。

## 5 施設整備計画案について

事務局より、資料「施設整備計画案」について説明した。

・先ほどご説明した事業計画・展示計画を今後展開していくために、施設としてどのような機能、諸室になるのか、6つの部門に分けて整理した。

本日は、写真資料、イラスト等に基づいて、こういう雰囲気施設のしたい、こういった空間、機能があったら良いという意見を出していただき、施設の雰囲気、佇まいについて整備計画の中に文書として盛り込んでいく。来年度以降、建築や展示の設計の段階では、いずれの契約方法であっても、整備計画案を十分踏まえた上で設計者に提案してもらいたいと考えている。

・本日皆さまからいただいたご意見については、整備計画案の中に文書として肉付けをし、また、施設全体、部門ごとの大まかな規模、面積と漱石山房の再編の展示空間のイメージ図を、最終的な基本計画案に盛り込むことを想定している。この計画案の中に、施設の完成予想図のようなものを想像された方もいらっしゃるかもしれないが、それは設計の段階で作成する。現段階では、この検討会に専門家や区の職員だけではなく、地域の方や公募委員、多彩な分野の方々に検討委員として参加していただいている趣旨を踏まえ、施設の雰囲気や佇まい、あり方等について、方向性やイメージを共有したいと考えている。

## 6 新宿歴史博物館見学、

事務局の北見学芸員の案内により、新宿歴史博物館内の書庫、閲覧室、荷解室、トラックヤード、資料用エレベータ、収蔵庫前室、収蔵庫などを見学した。

（休憩）

## 7 施設整備計画の検討

### (1) グループ討議の進め方

・本日は席の移動はしない。

・グループ討議の時間はとりまとめを含めて 20 分程度で、そのあとテーブルごとの発表を行い、

皆様のご意見を頂くという形にしたい。

- ・事前にお願ひした写真資料を皆さんに示しながら、何故その写真を選んだのか、例えば、「ここが漱石山房のイメージに近いんじゃないか」という話をグループでしていただきたい。また、いままで訪れた美術館とか博物館にこういう空間があった、またはこういう体験をしたというお話でもよい。
- ・意見は付せんに書いて、模造紙に貼り、集約する。
- ・進行と発表はサブファシリテーターが行う。
- ・ビデオカメラで写真をスクリーンに映しながら発表する。

## (2) グループ討議 (約 20 分)

## (3) テーブル発表 (概要)

### テーブル1

- ・無機質なものは避けたいという観点から、柔らかさや温かさを出していけるといいのでは。
- ・北九州市立文学館は、円周を使った展示になっている。例えば、二重の円の外側で漱石像を展示し、内部で漱石の内面を展示するなど、建築と展示が一体的に、その意図をきちんと伝えられる建築であるといいのではないか。
- ・記念館の建築は、漱石山房の再現建築とはデザインや仕様の違う建築がいいのではないかという意見が大勢を占めた。
- ・記念館の屋根の形状について、いわゆる箱はやめたほうがいい。
- ・地下を使う場合は、ループルのピラミッドのように地上と地下をうまくつなぎ、しかも、象徴になっているというように、地下をつくる場合は工夫していけるといい。
- ・カフェなどで、ゆったりとくつろげるような空間がよい。
- ・たばこを吸う人にも配慮する。
- ・見終わったあとに行き詰まり感のないように、何も無い空間といったものも大事。
- ・これから書籍がどんどん増えていくので、広い収蔵庫は必要。
- ・駐車スペースについて、通りからきちんとバスが入られるようにしていく必要があるのでは。
- ・基本的には、開放感、柔らかさ、それから、漱石の思想をきちんと表現できる建築と展示の融合などがこのテーブルの中心だった。

### テーブル2

- ・主に外観の話とカフェの話、映像の話と漱石の銅像についての話をした。
- ・玄関の再現は必須である。玄関の建築の詳細は分からないかもしれないが、玄関からの経路をたどることは、体験として非常に重要なのではないか。
- ・漱石山房の再現部分は、当時の雰囲気再現するが、記念館の建物は、すごくモダンにし、再現のレトロな部分とのコントラスト・ギャップを生かしたような方がいいのではないか。
- ・入り口は、牧野記念庭園のような少し和風のイメージで、入りやすい空間を作ってほしい。
- ・カフェは、大正ロマンの喫茶コーナーで、本が読めるなど、ゆったり過ごせる空間がいい。
- ・現在の公園にある銅像はあまり評判がよくない。村上隆のフィギアを作ってもらってはどうか。
- ・講座室を有料で貸し出す。

### テーブル3

- ・主に外観とアプローチ等が中心の話になった。
- ・明治の建物の雰囲気分かるような外観とすれば、その地域の象徴的な建物になっていくのではないか。
- ・逆に、ガラスのようなもので無機質な、透明感のある建築にして漱石山房が中に見える形で周囲の街並みと調和する整備をしていく。
- ・敷地が広くないので、記念館までのアプローチとして通りも含む周辺地域を整備していけないだろうか。例えば、イチョウ並木やガス灯を整備する、地域の方のボランティアで掃除をしていくなどによって通りの雰囲気も変わってくるのではないか。
- ・山房の再現空間や、エントランスは吹き抜けで明るいほうがいい。
- ・全体の機能について、全体を満遍なく整備するというよりは、メリハリをつけていったほうがいいのではないか。山房を中心とした部分に力を入れていくほうがよい。

### テーブル4

- ・庭、外構から記念館へのアプローチについて、建物だけではなく、例えば、芭蕉の木や植栽自体がシンボルになるような、象徴的な空間としてのアプローチのしつらえといったものも大切ではないか。いわゆるモニュメントのようなものもあってもよい。
- ・鴨長明の方丈庵のように、漱石の思想が感じられる建物に。
- ・ブックカフェがここにはびつたりと合うのではないか。
- ・カフェも部屋の中に作るというよりは、少し庭に面した、展示と庭との間をつなぐようなところに持ってくるといった配置の工夫。
- ・展示の要素として、漱石にちなんだ料理も展示室の中にあると、少し柔らかい感じになるのではないか。
- ・空間のイメージとしては、やはり、明るい木の感じ、また、落ち着いた木の感じ、木彫といったイメージが強い。
- ・外観は少し工夫をして、目的なく歩いてきた人も中に入っていきたいような工夫。
- ・石を埋め込んだような、懐かしい土間のようなものもあるのではないか。
- ・モダンクラシック、ネオクラシックなどの建物をイメージするというのと、建物の中と庭と、それをつなぐカフェが重要なのではないかとのお話で盛り上がった。

#### (発表に関する意見)

- ・喫煙室について、現在どこの建物に行っても禁煙が徹底している。煙はいくら遮断しても、館内に出入ってきて作品にも影響する。あらためて喫煙室をつくるということは反対。

#### (4) 講評

- ・山房周辺の植栽に関して、皆さんとても関心がある。漱石の草花に対する愛着は、ほかの作家に比べても高いと思う。一つの案として、「漱石庭園」というものをつくって、漱石の日記や写真などから汲み取れる植栽を集めた、小さな公園をつくる。そこに鑑賞するためのベンチを置いたり、ボランティアの人たちが手入れをしたりするような形はどうか。

都内の文学者たちの中では、漱石が一番庭に関心が強かったのではないか。報告書の裏表紙の津田青楓の「漱石先生読書閑居の図」という文人画がある。漱石はこういったイメージを書斎の周辺に

生かそうとしたと考えられないこともない。

- 一つは、今の予定立地の周辺が普通の住宅街なので、あまり建物自体が主張するようなもので、目立たないほうがいいのではないか。やはり、周囲の環境に溶け込むような雰囲気建物がよいのではと思っている。その中で、木造家屋としての山房が再現されるため、その再現部分と外を取り囲む箱の部分というのは、メリハリがついていないと、一体化してしまい区別がつかなくなるので、そういった知恵が必要ではないか。もう一つ、このテーブルでもアイデアとして出ていたが、書齋の部分は、やはり上からのぞける仕掛けがあると面白いのではないか。
- 皆さん、それぞれの思いが当然ある、これをまとめていくのは、至難の業ではないかというのが一番の感想。

第1回に半藤末利子さんが、漱石の名の付くお菓子においしいものはないとおっしゃっていた。それは、名目が大事なのではなく、本物を出すことが重要なのだということをおっしゃりたかったのだと思う。施設について何が本物なのかと考えると、私は明治だと思う。明治という時代に生きた漱石が重要なのだということ。だから、建物あるいは、風景、庭を考える上でも、明治というものが核になるのではないかという考え方をとっている。

東京大学の構内には、明らかに大学の関係者ではない人が歩いている。本郷のキャンパスは、関東大震災のあとに整備されて、レンガの建物があり、イチョウとケヤキの並木がり、石畳があるという、ただそれだけなのだが、人が集まってくる。それは、やはり何か本物があるからだと思う。そういった空間が実現できたら、地味だけれども本物の空間、生活の場があるということにつながるのではないか。これは、中川副座長がおっしゃっていた地域づくりとも通ずるところがあり、そこは重点的に考えるべきかと思う。

- キーワードは、「オープン」、「開かれた」ということ。ハードの面でいうと、光、開放感、外からの空気感、これが極めて大事ではないか。それには、ガラスの使い方が一番工夫のしようがあると思う。漱石は、官僚だった森鷗外と違い、民間の人。そうすると、建物としてもソフトの面でもオープンがキーワードになる。地域のいろんな人が気軽に出入りするような施設。例えば、カフェやレストランでいうと、あそこの喫茶店でお茶を飲もうと、それだけで来てもらえるような、そういったオープンなものかどうか。オープンというキーワードで、建物も中身もつくっていききたい。

## 8 本日のまとめと次回の告知

(座長) 若い人が勉強するために、あそこに行くと漱石の資料がみんなあるから行ってみようと思えるような雰囲気が必要ではないかと思う。本はなるべく開架式にしたい。また、講座室はなくても、例えばエントランスを工夫し、小中学校のひとクラス分、40人ぐらい来たときに、集まって説明をできるスペースを確保できれば、活用しようがあるのではないか。

今年度とはとにかく夢を語る事が中心になる。それを具体的にどういうふうにつけていくのか、来年度以降に受け継がれていくので、今回出したいろいろな意見、イメージが十分生かせるように、記録として残していきたい。

(事務局) 次回は、2月16日(土)午前9時30分から、場所は榎町地域センターを予定している。